

絶望という名のアンソロジー

山口 仁史

幼いころ、戸惑いと鼓動に戒められた
詩人は綴った「書を捨てよ 街に出よ」
若人（わこうど）よ 何もかも金繰り捨てて旅に出よ
変わることに一縷の希望を託し
年を重ね 旅の終わりに諦めの境地を垣間見る

失ったものは戻らない
その空っぽに新しいものが入る
「心の整理」と人は言う

五体の動きが友だちと違うのはなぜだろう
それでもまだ五体はここに在る
五体が在ることを天に感謝し 再び動き出す
若人（わこうど）は少しずつ助走する
監督は銘打った「走れ、絶望に追いつかれない速さで」

子供の頃の苦渋の思い出
恐ろしいほどに圧倒的多数の断片が散りばめられている
大人になってもその数には敵わない
でも不思議と思い出を抱きしめたくなることがある

「偶然は必然である」と原作者は残し 時代を過ぎ去った
「絶望の中から這い上がる若者が希望だ」と学者は語り 海底に眠った
終わりは突然やってくる でも予兆（きざし）はある
どちらも夢となり現実となる

才能がなければ秀才になれという 秀才になれなければ沈んでしまう
異なる方向へ一歩進めてみよう 生き様は裏切らない 良い意味でも悪い意味でも
凡人には異次元の見えない未来がある

心の中の小さなブラウン運動が次のエネルギーとなることがある

時間がないと焦ることがある 時間がないと諦めることがある

「時間は作るものだ」と教育者は教えた

「明日できることは今日するな」と年長者は諭した

時間が出来た瞬間に出会った

子供の頃、成りたい自分があった

夢というものを掴めなかった

でも 夢を抱えたままでもいいじゃないか

その抱え方は人それぞれ

一つ前の時代人は説いた「武士道とは死ぬことと見つけたり」

生き抜くということは死ぬことを意識すること

生きるというのは前を向くこと 病むというのは後ろ向きになること

病んだらまず2週間休もう 体が生きようとする切ない兆しが見えてくるから

心が暴れて眠れない夜がある 心が痛んで迎える夜明けがある

タバコを吸って やつと息が抜けると思った

酒を飲んで やつと1日を健やかに終えられると思った

脚本家は銘打った「逃げるは恥だが役に立つ」

先を見て不安になるなら目の前を見よう

心配ない そこに見えるものが現実という真理だから

本物がわからず偽物に魅惑される そんな生き様がここに在る

B級C級万歳 暗黒の夜に散りばめられた小さな星屑が大好きだ

弱者ほど人の辛さに共鳴できる 共鳴しなくてはならない使命がある

「強くなければ生きてはいけない 優しくなければ生きていく資格はない」

かの国の流行作家は主人公にこう語らせた

先輩は諭した「自由を謳歌するなら宗教と政治には手を出すな」

苦みがわかる頃 この禁制を破った

足枷ができて 家族ができた

「靴を揃えて脱ぐ自由」という言葉を何時しか覚えた

早春

森本 眞智子

さびれた風景の とある駅
房飾りのついたシヨールをまとい
ひっそりと春は 降り立ったのだった
郊外電車の沿線には
穂絮をなくした芒たちが
身ぶるいしながら彼女を見ていた

冬でもなく 春でもない
気まぐれで あいまいな季節
子供でもなく
大人でもない少女のように
ただ 見守るしかない季節

水の音 風の音 ドアのきしみ
五線紙へ
音符はどこまで 音を表現できるか
街の色 花の色 ひとつのおもい
言葉はどこまで 伝えきれるのか

言葉はいつも わたしの心にたどり着けない

直線 あるいは曲線
交差して天空にふしぎな造形をえがく裸木
余分なものを払い落として
ただ 実直なだけの街路樹が
なぜ こんなにも美しい

街を歩く
はじめての訪問者のように
海に近いこの街は
今日 雲にも限りなく近くて
わたしは すすほどの影も連れずに
ひとりで歩いて行った

